

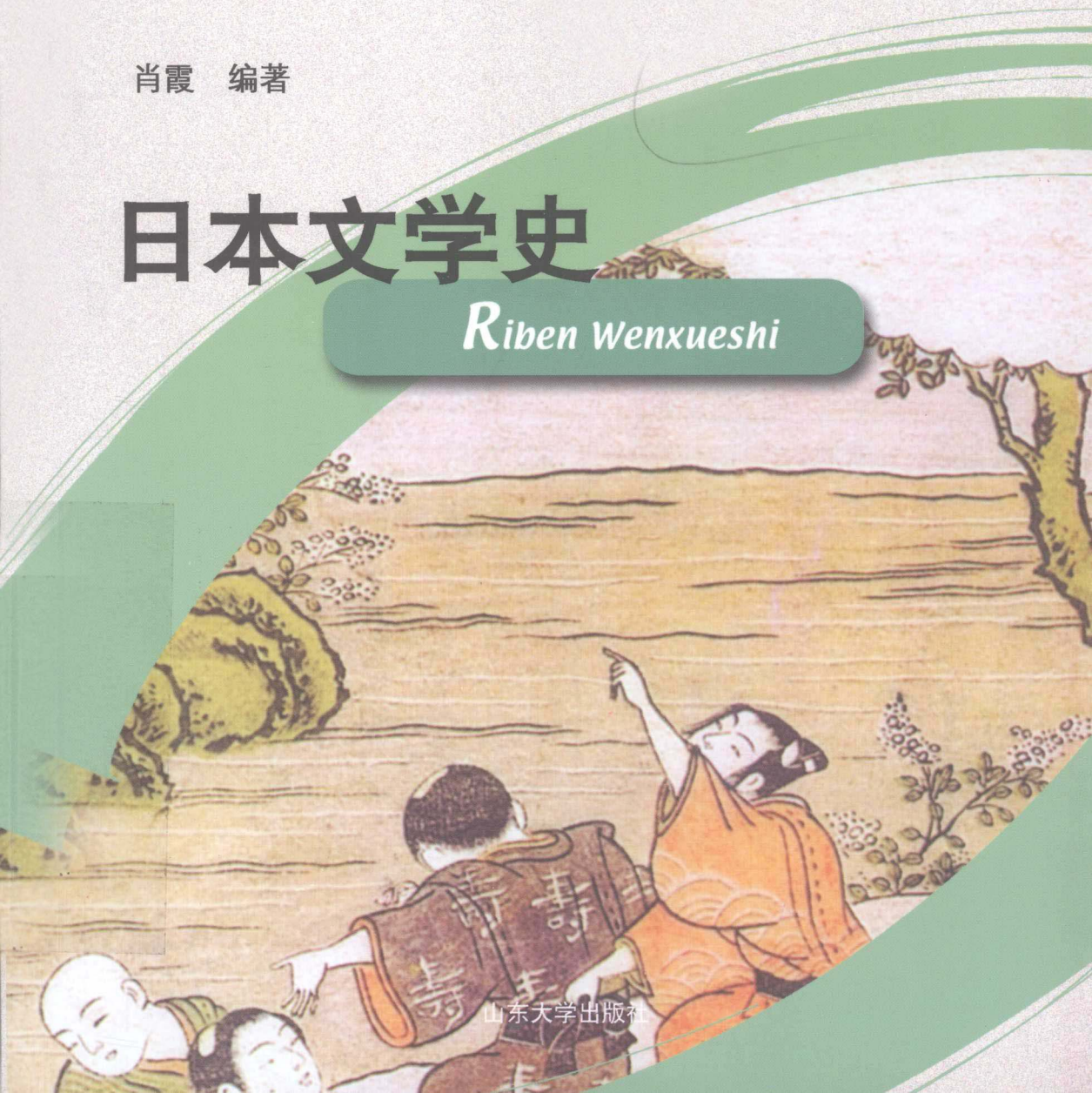


普通高等教育“十一五”国家级规划教材

肖霞 编著

日本文学史

Riben Wenxueshi



山东大学出版社



肖霞 编著

日本文学史

Riben Wenyueshi

江苏工业学院图书馆
藏书章

山东大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本文学史/肖霞编著. —济南:山东大学出版社,2008.3
ISBN 978-7-5607-3555-9

I. 日...

II. 肖...

III. 文学史—日本—高等学校—教材

IV. I313.09

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2008)第 033063 号

山东大学出版社出版发行

(山东省济南市山大南路 27 号 邮政编码:250100)

山东省新华书店经销

济南铁路印刷厂印刷

720×980 毫米 1/16 23.75 印张 363 千字

2008 年 3 月第 1 版 2008 年 3 月第 1 次印刷

定价:38.00 元

版权所有,盗印必究

凡购本书,如有缺页、倒页、脱页,由本社营销部负责调换

前 書 き

文学を^{ひもと}けば、そこには文化の歴史が垣間^{かいま}見えてくる。したがって、文学には、個々の作品の内容や作家のイメージといった具体面だけでなく、その国、その時代の思潮・政治・経済などさまざまな面も表現されていると言える。

文学の価値は、その作品が読者に読まれることによって、人々に感動を与え、場合によっては啓蒙や教訓を示唆し、美的感覚を函養させるところにある。

日本の文学の歴史は長い。古代から近世までのルートを丹念に読み解いていけば、そこには日本人の一貫した民族性や、また時代ごとの変遷も窺い知ることができる。

日本語教育においては、一通り日本語の文章が読め、文法がわかり、流暢に日本語が話せるというレベルにとどまることなく、日本民族の文化を理解し、独特な感性を捉えることが肝要である。その一翼を担うものに日本文学史がある。

<日本文学史>は日本語学科の学部生の必修科目である。しかし、従来この科目の適切なテキストがなかなか見当たらなかった。そこで私はこの科目に数年携わった経験から、中国人の日本文学学習者を対象とし、種々の日本文学史の資料に拠ってできる限り詳細に、また体系的なテキストを作ること心をかけた。

本テキストの執筆・編集の基本方針は次のとおりである。

- 1 個々の作家、作品の研究や説明は比較的簡単にし、日本文学の歴史的
事実の把握に重点を置いた。
- 2 日本文学の歴史を辿りながら、おのずと漢文学の発生・発展が究明さ
れるような編集を心がけた。
- 3 中国人学習者にとって難読と思える日本人名や文学作品名、地名や年
号などには、できるだけルビを付した。
- 4 本テキストは、古代前期・古代後期・中世・近世・近代前期・近代後

期の六部から成っている。各時代ごとに、その時代の文学の概観・ジャンルごとの解説・まとめを配し、作家・作品の特徴を詳しく説明するように考慮した。

- 5 例文として取り上げた和歌・俳句・文章などには、全て語彙の説明、現代語訳を加えた。これによって、誰にもわかり、かつ独学もできるように工夫した。また、語彙の説明では、中国人学習者に不可欠な知識などにも触れて、詳しくわかるように配慮した。
- 6 本テキストでは、作品名はすべて〈 〉によって、引用文や重要な語句は「 」によって表示してある。

本テキストの編集にあたり、多くの資料を参考にしたが、そのすべてを参考文献の部分に並べてある。その中の主なものは、〈標準日本文学史〉（四訂新版文英堂 1996 年 1 月）・〈注解日本文学史〉（七訂新版中央図書昭和 58 年 12 月）・〈注解日本文学史〉（八訂新版中央図書平成 2 年 2 月）・〈詳説日本文学史〉（初版数研出版平成 2 年 2 月）・〈詳説日本文学史〉（三訂版数研出版平成 10 年 2 月）・〈日本文学史〉（初版おうふう 1997 年 5 月）・〈新修日本文学史〉（新訂版京都書房 1999 年 1 月）・〈流れと演習 新日本文学史〉（初版京都書房 1995 年 1 月）・〈実戦演習 日本文学史〉（数研出版編集部編平成 10 年 2 月）などである。以上の著書の編集者に感謝の意を表する。

また、本テキストの編集において、日本人教師の田端克敏先生・岩下寿之先生からいろいろご援助をいただき、年表・練習の整理などの仕事においては、院生の杜姍珊さん・郭燕梅さんの協力を得た。ここに、心から謝意を表する。日本文学史全体の流れを立体的に説明することに主眼を置いたこのテキストが、学部生の文学史学習に役立つことができれば、編著者にとって大きな喜びである。

編著者

2008 年 3 月

目 次

第一章 古代前期の文学	1
第一節 古代前期の文学概観	1
一、文学発生の背景	1
二、日本文学の芽生え	4
第二節 最初の文学——口承から記載へ	6
一、神話・伝説・説話の誕生	6
二、神話の体系化——史書・書誌の編修	7
三、氏族の伝承と仏教説話	10
第三節 祭祀から生まれた文学	11
一、日本人の固有信仰——言霊信仰	12
二、霊力が宿る言葉——「祝詞」と「宣命」	12
第四節 詩歌	14
一、古代歌謡——記紀歌謡	14
二、最古の和歌集——〈万葉集〉	17
三、最初の漢詩集——〈懷風藻〉	25
まとめ	28
第二章 古代後期の文学	29
第一節 古代後期の文学概観	29
一、文学の背景	29
二、文学の特徴	31

第二節 詩歌の発展	35
一、漢詩文の隆盛——唐風謳歌の時代	35
二、和歌の復興——〈古今和歌集〉と「三代集」・「八代集」	40
三、私家集・歌論・歌謡	47
第三節 物語の出現	53
一、物語の誕生——作り物語と歌物語	54
二、物語文学の集大成——〈源氏物語〉	58
三、〈源氏物語〉以後の物語	62
四、歴史物語——〈栄華物語〉・〈大鏡〉	64
第四節 日記・随筆	65
一、日記文学の登場——〈土佐日記〉・〈蜻蛉日記〉	65
二、最初の随筆——〈枕草子〉	69
第五節 説話文学	72
一、説話文学の流れ	72
二、説話文学の集大成——〈今昔物語集〉	73
まとめ	75
第三章 中世の文学	76
第一節 中世の文学概観	76
一、中世文学の背景	77
二、中世文学の形態	79
第二節 詩歌・連歌・歌謡	81
一、新時代の和歌——〈新古今和歌集〉	81
二、私家集——〈百人一首〉・〈金槐和歌集〉	85
三、和歌の発展——「十三代集」と歌論	88
四、連歌の生れ	90
五、連歌の完成と〈水無瀬三吟百韻〉	92
六、俳諧連歌と歌謡	94

第三節 漢詩文	96
一、武家政権と文化欲求	96
二、仏教の盛行と五山文学	97
第四節 物語文学の発展	103
一、擬古物語	103
二、軍記物語——〈平家物語〉・〈太平記〉	104
三、歴史物語——〈水鏡〉・〈増鏡〉	110
四、説話文学——〈宇治拾遺物語〉	111
五、西欧文学の伝来——キリシタン文学	112
第五節 日記・紀行・随筆	113
一、日記文学の発展	114
二、紀行文の出現	115
三、新時代の随筆——〈方丈記〉・〈徒然草〉	116
第六節 劇文学	120
一、能——猿楽と田楽	120
二、狂言の独立	124
まとめ	128
 第四章 近世の文学	 129
第一節 近世の文学概観	129
一、近世文学の背景	129
二、近世文学の表現	133
第二節 詩歌	136
一、和歌・歌論・国学	136
二、俳諧——貞門・談林・蕉風	142
三、天明期の俳諧——与謝蕪村	153
四、幕末の俳諧——小林一茶	155
五、狂歌	156
六、川柳の出現と衰退	158

七、歌謡——組歌・長歌・端歌・芝居歌	160
八、漢学と漢詩文の隆盛	161
第三節 町人小説——享樂的な文学	164
一、仮名草子	164
二、浮世草子——井原西鶴とその作品	165
三、読本——前期読本と後期読本	168
四、洒落本	171
五、滑稽本——前期と後期の滑稽本	172
六、人情本	174
七、草双紙——黄表紙と合巻	175
八、その他——実録・随筆・地誌	177
第四節 劇文学	179
一、浄瑠璃——成立・全盛・衰退	178
二、歌舞伎——成立・発達・衰退	182
三、話芸——笑話・講釈	185
まとめ	187
第五章 近代前期の文学	188
第一節 近代前期の文学概観	188
一、文学の背景	188
二、文学の諸相	189
第二節 新文芸の誕生——小説・評論	193
一、啓蒙期——翻訳文学と政治小説	194
二、写実主義——〈小説神髓〉・〈小説総論〉	197
三、擬古典主義——「硯友社」とその文学	200
四、浪漫主義——森鷗外・〈文学界〉	204
五、自然主義——「表面描写」と「一元描写」	211
六、反自然主義的傾向——余裕派・白樺派・耽美派	218
七、新現実主義文学	231

八、プロレタリア文学	237
第三節 詩歌・短歌・俳句	237
一、詩歌	238
二、短歌	247
三、俳句	257
第四節 戯曲	262
一、演劇改良と新派劇	263
二、新劇連動	264
まとめ	267
 第六章 近代後期の文学	 269
第一節 近代後期の文学概観	269
一、文学の背景	269
二、文学の諸相	269
第二節 近代後期の小説・評論	272
一、プロレタリア文学・芸術的近代派	272
二、昭和十年代の文学	280
三、昭和二十年代の文学	288
四、昭和三十年代の文学	299
五、昭和四十年代の文学	304
六、昭和五十年代の文学	307
第三節 詩歌・短歌・俳句	312
一、詩歌	313
二、短歌	318
三、俳句	322
第四節 戯曲	327
一、昭和初期の戯曲	327
二、戦後の戯曲	328
まとめ	330

付録.....	332
一、日本古国名称对照表	332
二、日本文学史年表	334
三、実戦演習	353
参考文献.....	367

第一章

古代前期の文学

第一節 古代前期の文学概観

古代前期とは、紀元前千年から七九四年までの間であり、藤原京¹ (694)・平城京² (710) など政治や文化の中心がおもに大和地方（奈良県）にあった時代で、文学においては 大和時代（AD300 ごろー710）と奈良時代（710ー794）の文学を含む平安京³遷都（794）以前の文学を指す。

一、文学発生の背景

社会的背景 日本列島における人類の生活は、先土器文化の時代から縄

-
- 1 藤原京：持統天皇の 694 年から、文武天皇を経て、元明天皇の和銅3 年（710）に平城京へ移るまで、3 代 16 年の都。今の奈良県橿原市高殿を中心とする、大和三山に囲まれた地域。
 - 2 平城京：元明天皇の和銅 3 年（710）に藤原京から移って、桓武天皇の延暦 3 年（784）に長岡京（奈良市）に移るまでの都。長岡京は、桓武天皇の初めての都。延暦 3 年（784）、平城京から移ったが、主唱者の藤原種継が暗殺されたりしたため、794 年都を平安京に移った。宮域の中心は京都府向日市にあり、今も長岡市があり、京都と大阪の中間に位置する。
 - 3 平安京：桓武天皇の延暦 13 年（794）に長岡京から移って、明治 1 年（1868）に東京に移るまでの都。今の京都市の中心部。

もんぶんか¹の時代（採集生活）を経て、やよいぶんか²の時代（農耕生活）へと進展する。弥生時代になると、すいとうこうさく³の技術が伝来して、生産力が一段と高まり、定住化した集団生活がそこに営まれるに至った。共同体的社会が形成され、血縁関係によって結ばれる氏族集団が纏め上げられて、しだいに各地に氏族中心の小国家が形成されていった。やがて、それらの勢力が併合・統一され、大和地方を中心とする倭王権が誕生した。そして四世紀後半から、日本は朝鮮半島との交渉が盛んになり渡来人も数多く、七世紀には、中国大陸との交流も多くなり、派遣された遣隋使や遣唐使らが活躍して、朝鮮や中国から文物・技術・制度などを輸入し、国家体制の確立に大きな力となった。その後、六四五年のたいかのかいしん⁴を経て、日本は中国のようなりつりようたいせい⁵が整備され、いわゆる中央集権のりつりようこくか⁶大和朝廷が成立し

- 1 縄文時代：縄文式土器を標式とする日本の新石器時代。土器の変化によって、五期に分けられ、紀元前 7・8 千年から数千年にわたって継続し、弥生時代と交代する。住居は竪穴式で、魚労・狩猟の採集経済段階にある。
- 2 弥生時代：縄文時代の後、古墳時代（3 世紀末から 7 世紀に）の前。紀元前 3 世紀ごろから後 3 世紀頃まで。大陸文化の影響を受けて、水稻耕作や金属器の使用が始まり、銅剣・銅鐸のほか、金属器も用いられ、金石併用期に属する。普通前・中・後の三期に分け、遺跡は関東の西に多い。
- 3 大化改新：大化元年（645）夏、中大兄皇子（のちの天智天皇）を中心に、中臣（藤原）鎌足ら革新的朝廷豪族が蘇我大臣を滅ぼして、開始した古代政治史上の大改革。孝徳天皇を立て、都を難波（大阪）に移し、私有地・私有民の廃止、地方行政権の朝廷集中、班田収受法の実施、税制の統一、古代東アジア的中央集権国家成立の出発点となった。
- 4 律令体制：律（刑法）、令（一般法規）に基づく中央集権的国家体制。645 年大化改新から始まり、大宝律令（701）・養老律令（718）の制定を経て確立。大宝律令は、律 6 卷、令 11 卷の古代の法典。大宝元年（701）に刑部親王・藤原不比等らが編修。天智朝以来の法典編纂事業の大成で、養老律令施行まで、律令国家盛期の基本法典となった。養老律令は、律・令各 10 卷の古代の法典。養老 2 年（718）に藤原不比等らが編纂を開始、天平宝字 1 年（757）施行。
- 5 律令国家：古代国家の形態の一つで、律令を統治の基本法典としたもの。巨大な官人群を擁し、人民に班田収授によって一定面積の耕地を保証する代わりに、戸籍に

た。

中国との交流が盛んになるに従って、大陸にある仏教や文化なども日本に伝えられ、政治体制が確立された。そうした中から格調高い飛鳥・白鳳^{あすか はくほう}の文化、ついで平城京時代の絢爛たる天平文化^{てんぴやうぶんか}²が花開き、日本という国の発展が記されていった。

風土的環境 中央国家の所在地である大和地方は、東には春日・高円・三輪^{みわ}の山々、南には多武峰・高取・吉野^{たかとり よしの}の山々、西には金剛・葛城・生駒^{こんごう かつらぎ いこま}の山々が青垣のように奈良盆地を囲んでいる。中には多くの川の支流を合流する大和川などが流れ、南には難波津^{なにわづ}（大阪付近）という重要な港にも通じ、瀬戸内海へ出るのは便利である。北へ行くのは日本海方面で、伊勢（三重県）を抜け、広い東国^{あづまのくに}へ行くのも便利で適した位置にあった。また囲まれた盆地は年中の雨量が少なく、穏やかな気候に恵まれた、豊かな地味^{ちみ}を持っているところに、国家の形成としての立地条件を十分備え、大和王権の基盤を支えた。

つけて租・調・庸・雑徭など物納租税や徭役労働を課し、個人人身支配を徹底した。日本では中国の隋・唐にならって7世紀半ばから形成され、奈良時代を最盛期とし、平安初期の10世紀頃まで続いた。

- 1 飛鳥文化：飛鳥時代の文化。7世紀前半の聖徳太子（574－622）時代が中心。日本最初の仏教文化として北魏や六朝^{ほくご りくちやう}の文化的影響のもとに展開、法隆寺に代表されるものが遺品として残存。白鳳文化：白鳳時代の文化。7世紀後半から8世紀初頭まで、飛鳥時代（6世紀から7世紀前半まで）と天平時代（奈良時代の後期）の間。中でも壬申の乱（672）後の天武・持統朝では、天皇の權威が確立し、律令の制定、記紀編纂の開始、万葉歌人の輩出、仏教美術の興隆など、初唐の文化の影響の下に、力強い清新な文化を創造した。
- 2 天平文化：奈良時代の後期、即ち平城（奈良）に都のあった710－794年間をさす。文化史、特に美術史上の時代称呼。天平文化とは天平時代を中心とする奈良時代の文化の称。白鳳期の後、弘仁^{こうにん}（810－824）・貞観^{じやうがん}期（859－877）の前。中国盛唐期の文化を国家的な規模でとりいれ、建築・彫刻・絵画・工芸などあらゆる部門で、高度の技術的習練による古典の様式を作り上げ、大陸的・仏教的な特色をもつ。

二、日本文学の芽生え

日本文学の原初は、「祭り」の場の詞章「呪詞」^{じゅし}から歌謡・神話へ自然界に対する畏怖と脅威——超人間的な力（神）を祭ることによって、共同体の安全、生産の豊饒^{ほうじょう}を願っている間に起こってきたものである。祭りの場で語られる神聖な詞章（呪言^{じゅごん}や呪詞^{じゅし}）は、韻律や繰り返しをもつ律文^{りつぶん}として発展し、その祭りの場で語られたものと音楽や舞踊と結びついて極めて渾然としたもの（うたう・おどる・かたる）は、文学の原型となった。しかし、共同体の統合に伴って、小国からやがて統一国家が形成され、「祭り」がさらに統合され、その神聖な詞章も言葉表現として自立・洗練化されていった。それが最初様々な歌謡・神話の形で定着され、文学の誕生と思われる。

口承から記載へ 日本には、独自の文字表記を持たなかった時代、神話・伝説・歌謡などは、専門的な伝承者の語部^{かたりべ}などによって、口から口へと言い継がれ歌い継がれていった。その伝承する語部の言葉（詩句・歌章）は、極めて自由かつ流動的なものであり、それは生き生きとした口承文学^{こうしょうぶんがく}の最初の姿であった。やがて、統一国家が形成されるにいたって、中国から漢字が伝来し、朝鮮からの渡来人の力も加わり、人々が漢字の使用に習熟するにつれて、今まで口承されていたものが文字に書きとどめられるようになり、即ち漢字による日本語の文字化が可能になった。漢字表記での困難さを克服するために、古代の日本人は漢字の表意性から表音性への試みをし、万葉がなを工夫して、また片かな・平がなの仮名文字を生み出してゆく。

律令国家の文学 中国文化の受容から律令制度という外来の制度によって支えられた、天皇を中心とする絶対的国家が確立されると、自国文化の独自性に対する認識も深められていく。こうした国家意識の目ざめと高揚とともに、漢文体や漢字の音訓を自在に使って編纂した史書や地誌が先に出てきた。

1 語部：共同体には神聖な「語りごと」を伝承する専門の者。なお、狭義には大和朝廷に仕え、賜姓^{しせい}を受け、儀式に際して、旧辞や伝説を語ることを職とした品部^{しなべ}。出雲（島根県）・美濃（岐阜県）・但馬（兵庫県）などに分布。

八世紀初めに、漢字による記録の発達によって、中央集権化を推し進める国家の事業として、神話・伝説・歌謡などの、古代国家による集大成といえる歴史書の〈古事記〉(712)、〈日本書紀〉(720)、地誌の〈風土記〉(713から)が編修されるようになった。一方、口承から記載への過程の中で、歌謡から洗練された和歌も独自の達成を遂げ、二十巻もある〈万葉集〉(未詳)にまとめられた。こうした気運に乗って、集団性を離れた個的な抒情と私的な伝承筆録も盛んになった。奈良末期の〈高橋氏文〉(789)、平安初期の〈古語拾遺〉(807)のように、一氏族の伝承を記録したものが編修された。ともに祖先以来の事跡や系譜を書きとどめたもので、記紀にない記述も見られ、古代の口承文学の貴重な資料となった。これらは、大体日本の固有信仰によるものであるが、仏教伝来後発生した仏教説話集の〈日本霊異記〉(822)が口承文学である説話の日本最初の説話集で、主として因果応報¹の仏理を説いている。

更に、近江(667-672)・奈良朝(710-784)の約百年間、六十四人の作約二十編を載せた〈懷風藻〉²(751)は、中国漢詩文の影響を直接に受けて出来たもので、当時漢詩文の隆盛を思わせる。なお中国詩学の影響から和歌に対する批評意識も生まれ、最初の歌学書〈歌経標式〉³(772)が編まれた。

古代前期文学の特性は、「明き浄き直きまこと」(宣命)にある。しかも、すべて貴族的官僚の手で編修されたものでありながら、広く庶民の心と姿を温存し、また後世の文学にとっての様々の源泉を湛えている。

-
- 1 因果応報：仏教の思想で、善い因を行えば富楽などの善い果を受け、悪い因を行えば貧苦などの悪い果を受けるという考えである。
 - 2 〈懷風藻〉：1巻、現存最古の漢詩集。淡海三船撰と伝えるが未詳。天平勝宝3年(751)の序がある。天智天皇時代から奈良時代に至る64人の詩、120編を年代順に集めたもので、中国六朝詩風に倣った日本の古詩の真髓を伝える。
 - 3 〈歌経標式〉：宝龜3年(772)、藤原浜成(724-790)撰の日本最古の歌学書。和歌四式の一つとして、和歌の意義・起源を論じ、中国詩論を模倣した歌病七種・歌体三種をあげて、それぞれ例示し論じる。

第二節 最初の文学——口承から記載へ

原始社会の人々が未だ自覚的に文学を創造することを知らなかったころに、文学的な性格を持っていたのは、呪術^{じゅじゅつ}的祭式における語りごとであった。語りごとは祭式の変遷に伴って内容や性格などを換え、村落の古老や氏族の語部によって口頭で伝承されていって、それは後世、神話・伝説・説話のような形に分類されまとめられて現在に伝わるものとなった。

一、神話・伝説・説話の誕生

古代の人々は、広々とした大自然の中に、超人間的な力のあらわれを見出し、それを神の力として恐れ敬^{おそ うやま}った。そこから最初の祭りが発生した。古代人は、神を祭ることで、その生活の場である共同体の安定をはかろうと試みたのである。共同体の祭りの場で語られたのは、祭りの由来・神の事跡や地名の由来・事物の起源など、また祖先も神とされ、共同体の起源の物語として語り伝えられた。

神話 古代人が、呪術的・信仰的な想像力によって、自然や人間界の現象や王権の起源を神格を中心に、口頭伝承として語り伝えられたのは神話である。本来、祭りの場における神にかかわる語り伝えで、祭式や儀式と深く結びついていた。それは事実ではないが、単なる空想でもなく、古代人の実生活に裏づけられた一つの真実を語り伝えるものであった。五・六世紀ごろ、漢字が中国伝来してから、神話はしだいに口承から記載へ、記載文学として散文化の道をたどっていた。

伝説 伝説と説話は神話よりやや広義の概念を意味する。伝説は、物事の起源や、英雄に関する話が多く、神話に比べて、歴史的・人間的・世俗的なものを中心に伝え語られている。

説話 話として信仰的な要素が失われ、話の構成そのもののものに興味を置いたものである。仏教的・世俗的な説話が多く語られた。

体系化された文学 以上のものは、ともに「語りごと」として各氏族の語